

編集後記

1980年代、アメリカは長引く景気低迷に喘いでいた。高い失業率、消費後退もあり、モノが売れない時代が続いた。製造メーカーは、生き残りをかけてスリム化を図った。本業の製造部門に専念するために、やや不得手な部門、物流を真先にアウトソーシングしていくが、その受け皿が3PLと呼ばれる一群であった。山野邊論文は、その生成経緯について検証を加えたものである。続く織田論文は、やはりモノが売れない現在の飽和状態のわが国において、物流事業者はいかにしてロジスティクス・マネジメントに取り組もうとしているのか、独自のアンケート並びにヒアリング調査に基づき分析を加えている。第3の浅井論文は、これまで一種の装置産業と考えられてきたコンテナターミナル業において、国際的な資本流動化がダイナミックに進んでいる様を、海外現地調査に基づき裏付けたものであり、正にグローバリゼーションの最先端を伝えている。

ところで、流通経済大学は、創立35周年記念事業の一環として去る11月2日、「いま物流の未来を考える」というテーマでシンポジウムを開催した。多数の参加者を得て、活発な議論が展開されたが、その模様については次号でお伝えしたい。

残り少なくなった20世紀の日々である。さて、20世紀に置いていくもの、21世紀に持っていくものの整理を急いでしなければ・・・

(2000年12月 古井)